

会 誌

第13号

窯業同窓会規約
ご挨拶 会長 山内俊吉
藤岡幸二氏の逝去を悼む 坂田 正
久保季吉さんを偲ぶ 山内俊吉
亀啓三郎さんを偲ぶ 倉田元治
私の近況 素木洋一
はや一年あまりに 佐藤正雄
近況雑感 後藤一雄
会報
大岡山通信

窯業同窓会規約

1. 本会は窯業同窓会と称する。
2. 本会は会員相互の親睦を図り窯業界の向上発展を期するを以って目的とする。
3. 本会は事務所を東京都目黒区大岡山東京工業大学内に置く。
4. 本会は第2条の目的を達成するために下の事業を行なう。
 - (1) 窯業技術懇談会
 - (2) 見学会
 - (3) 名簿の発行
 - (4) その他幹事会において必要と認めた事業
5. 本会々員は東京工業大学窯業関係者を以て組織する。
6. 本会の経費は、会員その他よりの事業寄付金その他の収入をもって支弁する。会計年度は毎年4月に始まり翌年3月に終る。
7. 本会は毎年度始めに総会を開き左の事を行なう。
 - (1) 会務の報告
 - (2) 役員の変更
 - (3) 規約の改正
 - (4) その他
8. 本会に左の役員をおき任期は2ケ年とする。但し再選は差支えない。
 - (1) 会長 1名
 - (2) 副会長 5名
 - (3) 幹事 若干名
 - (4) 常任幹事 5名
9. 会長、副会長および幹事は総会で選出する。常任幹事は幹事の互選とする。
10. 会長は本会を総理し、副会長は会長事故ある時、代行する。常任幹事は会務（庶務、会計）を処理する。

幹事は本会の重要事項を審議し、常時地方各職場並びにクラス等の状況、移動および本会に対する意見等を通報するものとする。
11. 本会は相談役をおくことができる。相談役は役員会において推薦し、総会において承認をうる。
12. 本会に支部を置くことができる。支部は本部と連絡を密にし、本会の発展に協力する。（昭和46年4月27日総会において一部改正したもの）

ご挨拶

会長 山内 俊吉

一昨年の総会は名古屋で盛大に開催させていただきましたが、49年度、50年度の総会は幹事会で色々相談の結果、少しでも多くの方の御出席が得られるのではないかと窯業協会の総会にあわせて東京の都道府県会館で開催いたしました。兩年共100余名の御出席を得て盛大な会となり誠に喜ばしく皆々様の御協力に感謝いたしました次第であります。

総会では例年のように卒業50周年の方々の御祝をいたしました。49年度は大正13年卒業の6名、50年度は大正14年卒業の9名でありました。会員からの御祝を申し上げ記念品としては新進陶芸家加藤鈔君(昭和23年卒)の御好意による立派な作品を贈呈いたしました。大正13年前後は母校にとって忘れられぬ年であります。当時私は学友会幹事をしていたので学校の動きはよく知っておりますので一言つけ加えますと、さきに母校の大学昇格がきまり大正12年5月26日の母校創立記念日に学友会主催で大学昇格祝賀会を盛大に行き、間もない9月1日に関東大震災によって母校はその施設設備の全部をうしなしました。そこでそれからの授業は生徒を地方の高等工業学校に何人かずつ分散させて教育してもらおうという地方分散説と、学校は有機体である、施設設備がなくとも学校はある、地方分散は廃校に連なる危険もあるという非分散説の二つに分れました。結局後者の主張がとおり、色々画策し当分駒場の東大農学部(今の教養学部のところ)の一部を借りて11月から授業を開始することになり、他方努力の結果大岡山に約10万坪の敷地を求めてバラック建築を建てるように進展していったのであります。そして大正13年組は卒業まで駒場で授業を受けましたが卒業式だけは大岡山のバラックで行われました。従って大正14年卒業組は駒場から大岡山のバラックに移り大岡山で最初の授業を受けた方々であります。

それから50年母校の現状は当時広すぎると非難する人もあった大岡山の敷地も今はせまくなり現在長津田にさらに5万坪の敷地をもとめ研究

所、研究施設をそこに移し総合工学研究科(大学院大学)の新設、また皆さんからの寄付金による創立80周年記念総合研究館の新営等で既に長津田も近く一杯となり将来さらに拡大の地を求めねばならぬ位発展への一路を辿っているのです。この母校発展の有様を見て50年の昔卒業された上記の方々は極めて感慨深いことでありましょう。

次に同窓会のくらしの一端を御披露申し上げます。同窓会は従来会費はいただくが会員の皆様から事業援助の寄付金をいただき、それによって仕事をいたしてまいりました。

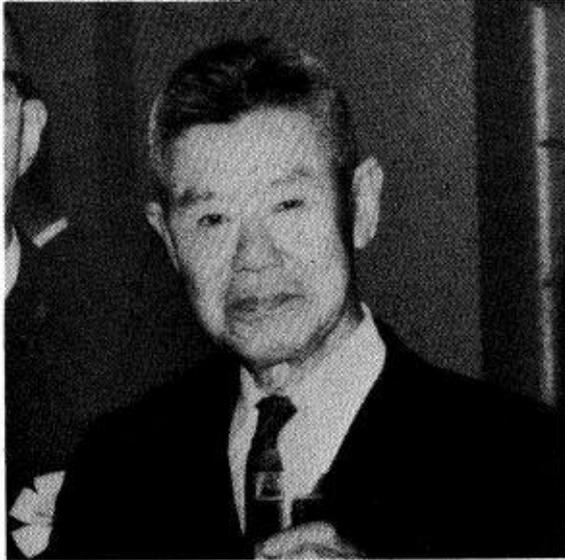
その中で隔年毎に発行しております名簿(付会誌)は経費がかかり事業資金だけではまかなえませんが、今までその費用の大部分を広告収入に依存して参りました。本年の不況はその広告収入への期待もうすれ出版がむずかしく思えましたので会員の皆様には事業資金の御寄付とは別に予約していただくことにいたしました。このように何事もやりにくくなりました事情御了承の上、今後とも御支援のほどよろしく御願い申し上げます。

このような時に本年の総会で私に重ねて会長をやるようにとの皆様御申しつけであります。皆様に御満足のゆくようにできる柄ではありませんので皆様の御支援御協力を御願いして最善をつくすつもりですから何卒よろしく御願い申し上げます。御承知のように今、日本だけでなく世界はスタグフレーションの中に大きくゆれ動いております。皆様の御心労も一入のことと思いますが、今後わが国の健全な発展のために何かと工夫をこらし知恵をしばり夫々の道で充分御奮闘下さいますよう切に御祈り申し上げます。御挨拶といたします。

(昭和50年9月1日)

藤岡幸二氏の逝去を悼む

坂 田 正



窯業界の元老、吾々蔵前窯業同窓の大先輩の藤岡幸二氏が今夏長逝された。誠に哀惜の至りに堪えない。百才まではと期待して居ったのに、矢張り昨年最愛の奥様をなくされた関係もあって、天国行を早められた様である。百才に垂々とするまで、頗る健康で数々の充実した業績を世に残こし内には立派な御子息達に恵まれ、外にはあらゆる人々に慕れながら他界された事は、本当に大往生と記すべきであろう。

7月26日、京都岡崎の本願寺別院で葬儀が営まれたが、東京から山内俊吉氏、倉田元治氏を始めとして窯業界、同窓会関係の知名人、又地元からは官界、産業界、工芸美術界、特に陶磁器関係の多数の参拜で、猛暑の日にも拘らず、焼香の列は延々と続き、生前の遺徳を物語るものがあった。お墓は、京都円山公園上の吉水庵安養寺にある。「歩々清風生」と云う言葉があるが、藤岡さんの在るところ常に春風のようななごやかさが感じられた。人々にこよなく敬慕された由来もここにあったと思う。一方律気な、物堅い人柄で特に約束や、時間等には頗る厳格で、所謂内剛外柔の人であった。

在世中数々の業績を残されたが、主なものを二、

三挙げると第一に京都松風工業株式会社に於ての高圧碍子の製造であろう。日本に於ける高圧碍子のパイロットとして蔵前卒業以来、若き日の半生を傾注され、坯土製造成型の機械化、洋式石炭窯による焼成（洋式窯など古い言葉であるが、その頃日本の陶業地は登り窯で、松割木を燃料として居った）その他技術工員の養成等、その頃に於いての生産性の向上、産業革命的の工場を完成された。窯業関係人は、京都に来ると必ず松風工業を見学し、大きな刺戟をうけたものである。その後中国、当時の満州にも高圧碍子工場を設立され技術者とし、経営者とし、斯界に大きな足跡を残された。

第二は、京都陶磁器工業組合の理事長として大戦後の混乱期に京焼の復興、発展に盡された事である。京都の陶業界は他の産地と異なって実に多岐複雑で陶芸関係、日用食器関係、電磁器関係、人形その他の雑品関係の部があり、業態も一品製作から大企業あり、伝統名家、芸術員会員から数百人を使用する会社あり、土をひねる仕事は同じでも行き方の違う世界である。

これを一つにまとめ運営して行く苦労は並大ていな事ではなかったと思う。私は当時京都府庁に在職して、藤岡さん理事長引出しを頼まれ、大先輩と組合の間であって、色々迷った思い出がある。組合の会議でも藤岡さんの人柄で難わしい論議も何となしに片付く様であった。

第三は「京焼百年の歩み」の編纂である。近世百年に及び京焼のあらゆる資料を収集し、科学的に経営史的にまとめられたのであるが、大変な労作であり、その精進ぶりには驚き入った次第である。京焼関係でも個々の年については著作や文献があるが、総合的に書かれたものがなく、要望されて居っただけに意義のあるもので後世に残る名著といっても過言であるまい。

私は永い間、藤岡さんを時に先輩、兄貴と教を受け、特に酒友、茶友とし共に京都の風月を楽し

んだ。酒は大関格で、酒仙平野耕弥先生が京都国立陶磁器試験所長として在職の当時は二人の杯を手にしての談論風発の状景が走馬灯の様に目に浮ぶ。又多趣味で美術工芸に明るく、茶亭と号して俳句等もものされた。又剣道、弓道も相当なもので、ゴルフ等は老体になってからも楽しまれた。

晩年はこの外茶の会を喜ばれた。在絡の同窓で茶楽会と名づけて、茶を飲むのか酒を呑むのか分からない愉快的会があるが、趣味談に夜の更けるのも忘れて語り合ったものである。茶会仲間も先般来窯業同窓の辻晋六、条川長次郎の両氏を失い、又この度は何時も正客の藤岡茶亭氏をなくし、淋しい限りである。窯業人とし明治、大正、昭和と永い人世を生き抜いた吾等が大先輩の略歴を付記し思い出のよすがとし、謹んで合掌に冥福を御祈る次第である。

藤岡幸二氏略歴

- 明 14 石川県金沢市に生る。
〃 38 東京高等工業学校窯業科卒業
〃 〃 農商務省工業試験所に入る
大 6 米国留学
〃 10 窯業協会京都支部長
〃 13 松風工業株式会社常務取締役
昭 10 満州松風工業株式会社社長
〃 22 京都陶磁器工業組合理事長
〃 〃 京都府工芸美術総合研究所委員
〃 33 日本分光工業株式会社社長
〃 37 「京焼百年の歩み」編纂刊行
〃 42 叙勲五等瑞宝章
〃 44 窯業協会功労賞、同名誉会員
〃 46 窯業同窓会相談役
〃 47 京焼その歴史と展望著作刊行
〃 50 兵庫県芦屋市にて寂す
〃 50 8月 従六位に追賜

訃 報

この2年間にお亡くなりになりました同窓の方々のお名前を記しまして、謹んで哀悼の意を表します。

吉田 吉三氏	大正 11 年卒
川村新太郎氏	大正 11 年卒
阿部 庄司氏	大正 7 年卒
橋本 謙一氏	元職員
一条茂喜司氏	明治 40 年卒
北川 信吉氏	大正 8 年卒

条川長次郎氏	大正 12 年卒
藤岡 了氏	昭和 24 年卒
中西誠治郎氏	大正 5 年卒
亀 啓三郎氏	明治 41 年卒
久保 季吉氏	大正 8 年卒
佐藤 保雄氏	大正 3 年卒
藤岡 幸二氏	明治 38 年卒
山口 静逸氏	大正 12 年卒
中条金兵衛氏	論博 22 年卒

久保季吉さんを偲ぶ

山内俊吉



本同窓会元副会長久保季吉さんが昭和 50 年 6 月 19 日忽然として逝去されました。御葬儀は 6 月 21 日鎌倉市由比が浜教会で多くの会葬者御参列のもとに、しめやかにとり行われました。誠に哀悼の極みであり悔みてもあまりある痛恨事であります。

久保さんは明治 29 年 4 月 25 日東京に生れ開成中学を経て東京高等工業学校に入学し、大正 8 年 3 月窯業科を御卒業になり直ちに八幡製鉄所に就職されました。翌 9 年 12 月板硝子の製造を開始したばかりの日米板硝子株式会社（昭和 3 年日本板硝子株式会社と改称）に転職されました。そしてわが国で最初の平板製造法コルバーン法による板硝子の製造を軌動にのせるために日夜心血を注ぎ、社業にはげみ今日のような日本板硝子株式会社の大をなす基礎づくりに専念されました。その後昭和 19 年日本板硝子株式会社の工場長、21 年生産部長取締役、23 年には常務取締役となり会社における技術の総師として奮闘されました。その御功績は誠に偉大であり、わが国板硝子

工業発展の大恩人の一人であります。

昭和 37 年常務を退き日本安全硝子株式会社の会長に御就任、39 年会長を辞任されました。その後老後の安定した生活を求めて鎌倉市稲村ヶ崎に居を移し引きつづき窯業界のためにつくしてこられました。

久保さんは本務のかたわら色々と業学界のためにつくされましたが特に窯業協会においては常議員、理事、支部長、副会長として、さらに 34 年には会長として協会を通じてひろく窯業界発展の為に大きく貢献されました。その功により 36 年の窯業協会創立 70 周年の式典では功労賞を受けられ、44 年からずっと窯業協会相談役として協会の樞機に参画してこられました。また 31 -34 年日本学術会議会員に選ばれ、わが国科学技術の振興のためにも大いに奮闘されました。

久保さんは誠心誠意の人であり、仕事にはきびしい反面極めて磊落でかつ友情に厚く、謙虚に話しあえる立派な先輩でありました。

ここに久保さんの学業界に対する数々の功績をたたえつつ、本会に与えられた多くの御芳情に深い感謝を捧げ心から御冥福を御祈り申しあげる次第であります。

亀 啓三郎さんを偲ぶ

倉 田 元 治



本同窓会会員亀啓三郎さんが昭和50年6月4日逝去されました。御葬儀は6月9日東京都港区・永平寺別院長谷寺において仏式により多くの会葬者御参列のもとにしめやかにとりおこなわれました。ここに御冥福をお祈りし、謹んで哀悼の意を表します。

亀さんは明治41年7月東京高等工業学校窯業科を御卒業になり、直ちに大日本麦酒株式会社に就職されました。昭和9年11月には同社尼崎工場長、同11年11月には同社保土ヶ谷工場長を歴任され、後年日本削子株式会社を経て昭和26年2月には新日本削子株式会社取締役社長に就任さ

れました。その生涯は一貫して窯業界とりわけ壘ガラス工業界の指導的立場にあって、壘ガラス工業の近代化に大きく貢献されました。

亀さんは同窓会の長老の一人としてこれを指導し、会の発展に多大の貢献をされました。また業学界のためにも御盡力されました。特に窯業協会には東京高等工業学校時代に入会され、第2次大戦中並びに戦後の混沌期に協会事業の発展のため御盡力されました。昭和12年には常議員として、同25年には企画理事として協会の運営に積極的に参画され、協会が窯業工学、工業に寄与する態勢を整えられました。昭和47年5月にはその多岐に亘る格別の御功勞により名誉会員に推挙されました。

我が国經濟の急速な成長は科学技術の進歩と工業の発展が原動力となったということができますが、近年その環境はとみに厳しさを加えております。かかる時に烈々たる信念のもとに窯業の発展に邁進されました大先覺を失いましたことは、まことに痛恨の極みであります。

ここに亀さんの輝しい御功績に対して、深其の敬意と感謝をささげますと共に、心からの御冥福をお祈り申し上げる次第であります。

私 の 近 況

素 木 洋 一

現在の私の職業は「自由業」だそうです。うまい言葉だと思っております。定年あるいは停年どちらでもいいことですが、退職してからも東京芸大には週1度非常勤講師として講義と実習の指導に出かけています。非常勤ですが休まず1年間続けて出かけているのは「基礎必修」で4単位の授業だからです。東工大時代と異なり、ここの学生連中は前日徹夜で窯をたき、あるいは実習をやった泥だらけの姿で教室にやってくる、スケッチブックをノート代りに使っていること、学生から受ける質問がむづかしすぎることなどです（東工大時代には講義中に学生から質問を受けることは全くといっていい位ありませんでした）。動物園の裏が窯場になっています。ここから、動物を眺めている人間の顔を見ていると変な雰囲気引づり込まれます。美術学部のとくに陶芸科の学生が東工大無機材料の学生と何となく変わっているのはこういうことにも原因があるのではないかと愚考しています。外国からの研究生も変人？が多く、私が講義用に持参する「やきもの」をルーペで詳細に眺め、釉内の気泡の役割などを質問したりして私をくるしめることもあります。

自由業というのは生活が不規則になる職業でもあるようです。原稿や講義の依頼も多く、図書館通いもひんばんです。現在の大学図書館は若い研究者には都合がいいようですが、初老の私には荷が重過ぎます。近眼鏡をかけて所在箇所を確かめ、老眼鏡にとりかえて重量物である本を左手にもって開き、目指す論文が見つかったらその本を抱へなおし、再び近眼鏡にかえて窓際まで運んでやれやれと一息つくわけですが、これを朝から夕方まで続けると片手はしびれ眼はつかれ、楽しみというよりは苦痛を感じます。夏が涼しいのが取柄です。

在職中、ある年突然国外に出かけ、各国の工場を見学したのが病付きになり毎年のように出張しましたが、それが習性のようになって退職後も続いています。国内の旅行ではよく暴風雨におそわれます。学内の様子はクロニクルである程度承知しております。図書館の帰りにときどきは研究室ののぞき歩きをしていますが無機材料工学科の皆様の変らぬ仕事振りを拝見させて頂き、益々の発展を身にしみて感じ取っております。

以上が私の近況の断片ですが、窯業同窓会のご繁栄と会員の皆様のご健勝をお祈りします。

は や 一 年 あ ま り に

佐 藤 正 雄

ことのほか残暑のきびしかったことしの夏も終わりに近づきました。先日突然木村先生から連絡があり、窯業同窓会報に近況報告を書くようにとのことでした。その後、催促の電話をいただき呑気者も重いペンをやっとりあげた次第です。工業材料研究所を退官してから早いものですでに一年半を経過してしまいました。研究所では同窓会の皆様には暖かくつきあっていただき心から感謝しております。

小生は電気化学科の出身ですので、大学在学時代分析実験などで窯業のかたがたと教室を共に

したことがありましたので、幾人かの人達とは特に親しくしてもらいました。

窯業研究所が建築材料研究所と総合して工業材料研究所が生れてからは窯業出身のかたがたとのおつきあいが、いっそう深くなりました。建築材料研究所ではまったくの畑違いと思われる建築専門の先生がたと研究生活を共にしました。その間いろいろの経験をさせていただきました。

退官後の身の振り方については斎藤工材研所長はじめ皆様の心こもるご配慮で、昨年四月、幾徳（いくとく）工業高等専門学校に引続き勤務す

ることになりました。幾徳という名称は学校創立者である大洋漁業(株)の中部社長の父君(幾次郎)の名前から出ているとのこと。工大での仕事は研究の方が主でしたので、講義ばかりの工専での勤めは物足りなさを感じました。工専の低学年は高校と同じですので、大学とはまったく様子が変わっており、やんちゃな連中もおり、すこしく手こずったこともありましたが。本年からは大学が併置されました。工専は3年以上のみです。大学では1年の化学関係の講義を受け持っており、新しい化学の勉強をさせてもらっております。週1回6時起床の日のある日には寝坊の身にはいささかこたえます。これも考えようで健康にはかえってよいのではないのでしょうか。来年からは大学

の学生実験が始まりますので、忙しくなることでしょう。

新しい大学には特に何か特長がなければと思います。手足のよく動く学生を育てることも一つの行き方と考えております。その意味で実験を大いに重視したいと思います。幸に工業化学工学科(工業化学科でも化学工学科でもない)の主任に工大名誉教授の藤田重文先生や、実験担当講師に工大の化学実験を長年担当した布施憲司先生が着任しましたので心強いかぎりです。工大より10年も長い停年ですので、まだ8年はあります。皆様の御力添えもいただき、よき大学を育て上げるよう頑張ります。

近 況 雑 感

東北大学・工学部建築学科

後 藤 一 雄

東北大に参り早や1年半を過ぎました。夏は涼しく、室からの眺めは絶好です。どういう加減か室にはゆとりがあり、応接間だとか休息室だとかがゆったりとあります。学生の製図室も広々としていて、一隅には模型の製作コーナーもあり、この点大変具合がよいのですが、研究費の方は、本部でのピンハネが大きくて、講座に来ると、東工大の半分近くです。至る所に無駄な重複が見られこの点東工大の合理化の大きな効果が感ぜられます。低成長下、研究費の増額は期待出来ないのに、臨時雇員の人件費が膨大となり、研究に廻せる金額はほとんど無くなるのではないかと心配しています。如何に東工大の合理性が大切かが判ります。長津田移転に際しては、なを一層の合理化をお計りになることを、おすゝめします。

〔一例をあげると、東工大では、建築と土木とは一つの事務室で事務員も4人位でしょう。東北大では別々で事務員は10人も居り、しかもそのほとんどは研究費からの雇員です。これを一緒に

して合理化することが伝統的習慣から出来ないのです。]

研究のことですが、現在私共の研究室の主要テーマとして、東工大近藤研の研究成果にかかる新セメントの建築への適用に関する共同研究を取り上げており、この点末だに私と東工大との縁は切れて居りません。

このセメントは省資源、省エネルギーの観点で近藤教授が試みられたポルトランドセメントで、スラグと、排脱石コウとを主体としたものです。

東工大の Patent になっています。ただ残念なことには東工大の Pat. にしたため、その後のあつかいがお座りになって、外国 Pat. を取りそこねてしまった事です。東工大も自分の Pat. については自主的に管理推進すべきでしょう。自らの Pat. を大切にしなければならぬことを学長に望みます。

研究は始まったばかりですが、どうやら予想以上に好成績のようです

学 位 授 与

前号に引き続き、それ以後の論文提出による学位授与は次の通りである。

日 付	氏 名	工 第	論 文 題 目
48. 9. 26	渡 辺 信 彦	408	肉厚陶磁器鑄込泥漿の管理方法に関する研究
〃	森 川 日 出 貴	410	低結晶質石英の研究
49. 3. 20	大 津 賀 望	436	粘土原料の精製に関する研究
〃	井 上 圭 吉	437	粘土粒子表面の性状の陶磁器製造工程におよぼす影響
50. 2. 12	宮 崎 秀 甫	475	高強度半水セッコウの製造に関する基礎的研究

叙 勲 授 章 そ の 他

この2年間に叙勲、授章あるいは授賞された方々のお名前を記し、お祝いを申し上げます。

江 副 勇 馬 氏 (大14)	勲三等瑞宝章	(昭和49年秋)
臼 井 芳 一 氏 (大10)	勲三等瑞宝章	(昭和50年春)
大 石 信 男 氏 (昭4)	勲三等瑞宝章	(〃 〃)
鈴 木 弘 茂 氏 (昭21)	紫授褒章	(昭和49年秋)
稲 村 泰 氏 (昭11)	耐火物技術協会功労賞	(昭和49年5月)
西 田 一 雄 氏 (昭7)	〃 感謝状	(〃 〃)
若 林 滋 氏 (大12)	昭和49年度日本鑄物協会賞, 感謝状	
宇田川 重 和 氏 (昭27)	窯業協会学術賞	(昭和49年5月)
瀬 高 信 雄 氏 (元職)	〃 〃	(〃 〃)
古 海 宏 一 氏 (昭23)	〃 技術賞	(〃 〃)
笹 本 忠 氏 (昭46博)	〃 進歩賞	(〃 〃)
嘉 悦 新 氏 (大9)	〃 功労賞	(昭和50年5月)
井 出 善 弥 氏 (昭3)	〃 〃	(〃 〃)
伊 藤 正 三 氏 (昭12)	〃 技術賞	(〃 〃)
田 上 嘉 秋 氏 (昭15)	〃 〃	(〃 〃)
尾 野 勇 雄 氏 (昭12)	耐火物技術協会 功労賞	(〃 〃)
池ノ上 典 氏 (昭12)	〃 〃	(〃 〃)
太 田 千 里 氏 (昭21選)	〃 功績賞	(〃 〃)
古 海 宏 一 氏 (昭23)	〃 〃	(〃 〃)
素 木 洋 一 氏 (昭15)	手島記念著述賞	(昭和50年5月)

(記載もれの方が御座居ましたら、誠に申しわけありませんが御連絡下さい。)

昭和49年度総会および懇親会

昭和49年度の総会と懇親会は5月28日、窯業協会年会会場に近い都道府県会館内レストラン富士で、97名の出席をえて盛大に開かれた。

総会は近藤常任幹事の司会で進められ、会務報告、会計報告が承認され、次期役員については会長一任となった。ついで大正13年卒業の石塚信太郎、稲生謙次、加藤登里男、佐脇祥夫、坂本有

文、山内俊吉、以上6名の方々に卒業50周年記念として加藤鈔氏の作品が贈られた。

引続いての懇親会は司会を名取常任幹事に交代して、8時すぎの散会まで賑やかに楽しい思い出と語らいのひとときを過ごした。

(加藤誠軌記)



昭和50年度総会および懇親会

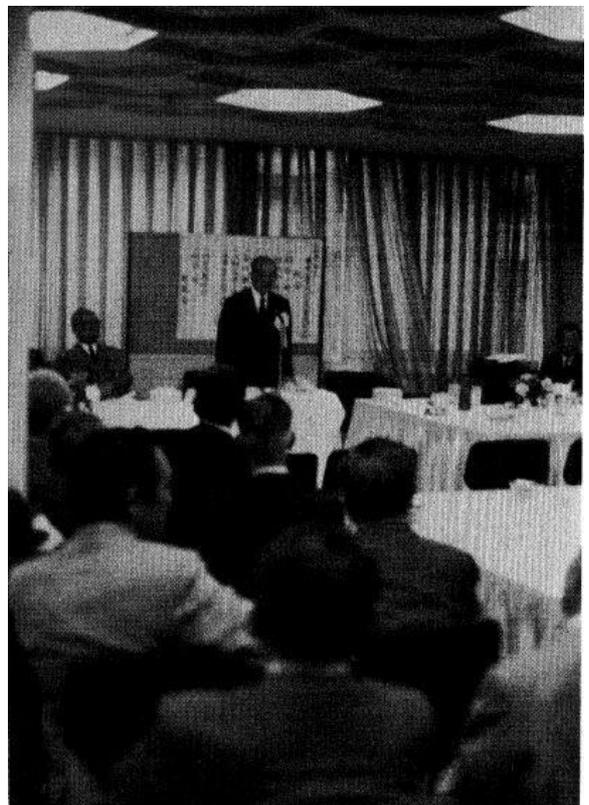
昭和50年度の総会と懇親会は5月15日、前年度と同じ都道府県会館内レストラン富士で開催された。

総会は浜野常任幹事の司会で進められ、会務報告、会計報告が承認され、前年度役員の全員留任が決まった。引き続いて大正14年卒業の内田要、鶴飼喬介、江副勇馬、江口愛二、金高寿男、倉田

元治、田口木弥、坂田正、山内卯吉、以上9名の方々に卒業50年記念として加藤鈔氏の作品が贈られた。

懇親会の出席者は105名、新入会員の紹介や、古い昔の思い出話、近況報告などをはさんで談が続き、8時すぎ盛会裡に散会した。

(加藤誠軌記)



昭和48年度収支決算報告書

(昭和49年5月24日現在)

収入の部

前年度よりの繰越金	231,634 円
懇親会会費	225,000
事業資金	322,500
広告料	736,000
銀行利子	<u>2,422</u>
	1,517,556

支出の部

記念品代	40,000 円
懇親会費	234,310
名簿編集費	53,300
印刷代	717,562
名簿発送代	103,385
為替料	6,895
会合費	17,565
総会連絡費	89,520
文具代	<u>1,010</u>
	1,263,547
差引残高	<u>254,009 円</u>

昭和49年度収支決算報告書

(昭和50年5月15日現在)

収入の部

前年度よりの繰越金	254,009 円
懇親会会費	339,500
事業資金	<u>189,000</u>
	782,509

支出の部

記念品代	30,000 円
懇親会費	347,093
為替料	894
同窓会ゴム印	6,160
文具代	<u>1,560</u>
	385,707
差引残高	<u>396,802 円</u>

昭和48年度事業資金寄付者芳名

(敬称略)

10,000円	山内俊吉	倉田元治			
6,000円	長崎勸				
5,000円	江副勇馬	吉田榮			
3,000円	森谷太郎	日笠泰行	有馬一喜	田代楠熊	
	飛川晨	真保義郎			
2,500円	半谷豊	宗宮重行			
2,000円	小島豊之進	内藤隆三	美崎敬之	菊地央	
	福井哲	竹沢義郎	伊藤正三	入江日出男	
	岡本十郎	長谷川安利	稲生謙次	森井良一	
	速水多根雄	居上英雄	長岡為行	山崎享	
	長谷正義	長崎準一	藤井稔	佐々木健介	
	花田明	松田弘	延義之	坂野義郎	
	田代仁	山口静逸	野口長次	森本幸治	
	赤塚幹也	中村能一	小尻由三	堀口順	
	後藤九五路	大厚功	古志野稔	太田千里	
1,500円	一色徳一郎	佐田敏之	斎藤勝一	安田栄一	
	中村厚節	毛利尚彦	深田義明	岩崎郁夫	
	上山節美	池田卯一	江上明七	中村義夫	
	尾川正博	外山進吉	松田与平	吉川俊吾	
	福井博	中川順信	桧山真樹	井関孝善	
1,000円	出原重臣	須藤信彦	水野茂廣	加藤政良	
	松本秀夫	中沢三知彦	山本廣一	境野照雄	
	新居善三郎	浜野健也	近藤連一	磯貝純	
	鈴木弘茂	坂田正一	藤井豊男	斎藤進六	
	梅田夏雄	大槻彰一	福井哲	小泉善之助	
	亀井四郎	田上嘉秋	加藤鈔	湧井歳一	
	名取賢荏	堀江勲史	埜崎堅造	吉田寛一郎	
	大庭宏	後藤誠史	塚本宏	山下寛	
	古府麟太郎	小坂丈予	加藤正之	加藤守光	
	柴田茂	角田穎保	大石信男	井出善弥	
	遠藤幸雄	大津賀望	磯部光正	鈴木正義	
	赤沢次男	張鴻烈	坂東文市	酒井利和	
	田中弘吉	猪股吉三	小卷卓司	前沢秀憲	
	原田賢泰	大場立夫	田辺昌之	加藤博之	
	長谷川泰功	木村一男	小玉正雄	中尾竹次郎	
	佐藤功	加藤欽一郎	田中重郎	山本登	

伊藤正彦	各務芳樹	田端精一	横瀬信次
菊地光治	布川晴男	今間朋春	寺内常次
柳正光	中村周清	水上義介	渡辺二郎
藤井洋治	清水広	野木平八郎	渡辺一行
木地一郎	尾関稲	平井正弘	渡辺信彦
森川鉄之助	古海宏一	森下一郎	加藤健造
黒田永二	北川信吉	中村秀一	浅野正和
飯塚常太郎	小林通夫	大内三男	山形安一
越前谷民雄	藤井透	竹原敏雄	中川邦好
内田健治	奥田進	松永一郎	中村敦
内山浩	若尾茂	渡辺永	大牟礼勝
巽昭夫	山内祐次	川口敏夫	友田正雄
中口國雄	水地満穂	安竹了和	中村三千夫
小川基次	菊地直機	足立原純一	三浦正二
藤岡了	高浜恒一郎	中村陽	川村新太郎
木船要太郎	桑山則彦	堅田尚	小林力
西川洋成	佐沢光夫	横溝政太郎	渋谷益男
加藤仁也	吉武素水	木村健	横山武
波多野宏文	倉本透	吉田格	大木通胤
伴野紘司	野口昭男	梅原一正	藤井達人
三津島千夫	影山静夫	五十嵐幹治	伊藤豊成
持田滋	伏野勅明	久保秀吉	
河田幸治			

500 円

総合計 322,500 円

昭和 49 年度事業資金寄付者芳名

(敬称略)

10,000 円	山内俊吉	江副勇馬	倉田元治
6,500 円	中山一郎	長崎勸	
2,000 円	坂野義郎	桑原直輝	
2,500 円	三沢賢一		
1,500 円	滝沢進	田辺昌之	田村忠臣
	延義之	左右田幸男	岩瀬滋
	井出善弥	木村脩七	岩井津一
	石毛健二郎	田賀井秀夫	河井信雄
	猪股吉三	山本広	境野照雄
	遠藤幸雄	柴田茂	斎藤進六
	浜野健也	秋山方宏	浅見進一
			鈴木弘茂
			角田颯保
			奥田進
			柴田景介
			田代仁
			倉田貢
			笹沼宗一郎

山本 勇 二	山室 忠 臣	名取 賢 荏	梅 田 夏 雄
太田 千 里	吉 田 格	江藤 哲 夫	尾 野 勇 雄
清水 広	大石 信 男	田上 嘉 秋	武 田 雄 二
川上 辰 男	向 井 敬 一	長岡 為 行	油 田 恒 夫
大牟礼 勝	亀 井 四 郎	奥 田 博	宗 宮 重 行
伊藤 秀 雄	加藤 六 美	井 関 孝 善	吉 田 一 栄
内藤 繁	成 田 正	杉 浦 孝 三	素 木 洋 一
赤尾 洋 二	村 上 三五朗	後藤 誠 史	佐々木 茂 式
山下 透	大庭 宏	若 林 滋	小 泉 善之助
酒 井 享	新 居 善三郎	龍 野 哲 男	森 谷 太 郎
川 浪 重 年	小 西 幸 平	水 野 茂 樹	大 城 敦 之
友 田 正 雄	福 浦 雄 飛	塩 川 浩	中 村 周 清
海老 昱 雄	野 崎 堅 造	加藤 誠 軌	近 藤 連 一
鯉 江 七 郎	松 田 弘	古 丸 勇	厚 見 昌 弘
田 中 博 一	中 沢 三知彦	小 坂 丈 予	
1,000 円	高 橋 久 男	野 口 長 次	高 宮 陽 一
	開 田 丈 夫	水 地 満 穂	山 岡 信 夫
	吉 村 満 雄		

総合計 189,000 円

第 12 回 Dr. Wagener 記念公開学術講演会

此度、頭記のような講演会を開催した。

この会は、主催が東京工業大学工業材料研究所、および同大学工学部無機材工学科、後援が東京工業大学窯友会、同大学窯業同窓会、同大学工業材料研究会で、昭和 49 年 11 月 14 日（木）、午後 2 時から東京工業大学本館四階第一会議室で開かれた。

講師は、東京大学名誉教授、日本学士院会員、坪井誠太郎博士、演題は、微粒物質の識別同定（その数例について）であった。

会は宗宮教授の進行で開始され、斎藤進六工材研所長の Wagener 博士の紹介を兼ねた挨拶があり、ついで Wagener の出身国を代表してドイツ連邦共和国大使館、参事官メンヒ博士の挨拶（別紙）があ

り、岩井教授の坪井先生紹介があつて、坪井先生の講演が始まった。

坪井博士は、偏光顕微鏡、X 線粉末回折法、エレクトロンプローブマイクロアナリシスを用いた固体物質の識別方法を述べられた。特に偏光顕微鏡の効用について十分説明され、今後の研究上の武器として益々活用されることを希望された。会は 85 名以上の出席者があり、第一会議室は立錐の余地もない位盛会であった。坪井先生は 80 才以上の高齢でありながら、約二時間、元気なお声で講演された。

終りに加藤教授の撮影した Wagener 先生胸像、陶管記念写真のスライド映写などがあり 4 時 30 分閉会した。
(宗宮記)

大岡山通信

第11回 Dr. Wagener 記念公開学術講演会

昭和48年11月26日(月)、午後2時から約2時間、東京工業大学第一会議室において上記講演会が開催された。

今回は無機材質研究所総合研究官、中平光興氏に「遷移金属カルコゲン化合物の結晶化学」と題する講演をお願いした。

同氏は結晶化学的立場から遷移金属化合物の不定化性と物理的性質について長年にわたり深く研究してこられたが、今回の講演ではそのカルコゲン化合物に関する研究の成果を詳細に解説紹介された。興味深い講演に来会者一同深い感銘をうけ、来会者の中には閉会後も講師控室で討論を続ける方がみられた。(宇田川記)

学内情報

現在、東工大は工学部、理学部および4つの研究所から成り立っており、今年からは長津田地区の大学院綜合理工学研究科も発足しました。窯業同窓会関係者は工学部の無機材料工学科(5講座)

工業材料研究所(6部門)および原子炉工学研究所(1部門)に所属しています。

学部は類別入学制をとっており、1年次学生は1類(理学系)、2類(材料系)、3類(応化系)、4類(機械系)、5類(電気系)、6類(建設系)に分かれて入学し、2年に進むときに志望、成績順に各学科に所属します。無機材料工学科(学生定員20名)に進む学生は2類に入学することになっています。

大学院は大岡山地区では高分子工学、化学工学、合成化学などと一緒に化学工学専攻として運営されており、学生定員の1/2は学内推薦で、のこりは一般選考によって充足します。ここ数年、学部卒業生の2/3以上が大学院に進学しています。

無機材料工学科は近年は仲々の人気で、学生の平均点も全学科のトップクラスです。学科の教官人事としては、素木洋一教授が昭和49年3月末で停年され、また今年、水谷惟恭、大門正機、山根正之の三氏が助教授に昇任されて平均年齢が大分若返りました。

無機材料工学科職員

講座名	教授	助教授	助手	技官,事務官
窯業学第一	加藤	水谷	桜井、太田	松山
窯業学第二	宇田川		大津賀、井川	荒井
窯業学第三	境野	山根	牧島	山本
地質鉱物学	小坂		浦部、大平	平林
材料加工学	近藤	大門	後藤	大沢
工場			林	上西、中

原子炉工学研究所職員

部門名	教授	助教授	助手	技官
原子炉燃料	鈴木	井関	丸山	長谷

工業材料研究所

工業材料研究所ではこの3月に前所長佐藤正雄先生と後藤一雄先生が定年退官されました。黒沼春雄氏と磯部光正氏はそれぞれ職業訓練大学校、無機材質研究所へと移られました。宗宮重行先生は合成無機材料部門の教授に昇進され、澤岡昭先生は超高温材料部門の助教授に昇進されました。助手、技官にも交代がありました。現在の陣容は次表の通りです。

建物などはほとんど変化がありません。南棟の11単位も引き続いて活用されています。宗宮先生担当の水熱合成設備も工場の一部に設置され、研究が着実に進められていると聞いています。工材研としてはここで一層の飛躍を計るため研究所の将来計画を考えました。大要は表に示す通りです。

材料基礎、プロセス、機能材料、応用材料工学の4本の柱に分類され、新旧併せて18部門から成ることを当面の目標としています。これに水熱合成材料研究ステーション、材料特殊加工施設、大型実験場を加えて総合的に運営することが考えられています。年次計画もたてられていますが、要は早い機会に完成し、高温材料、耐熱材料、耐火材料、耐低温材料、電子材料、超高強度材料、耐食材料、光材料など今日切に要望されている各種材料の基礎および応用研究を進展させたいと念願しております。これが絵に画いた餅に終わらないためにも、ご厚意ある批判と理解をお願いする次第です。長津田計画の概要は前号に詳しく述べられていますので省略しますが、長津田地区の研究所は東京近郊の田園地帯に位置するという自然環境にも豊まれており、将来の発展を期待したいものです。

工業材料研究所部門別研究系職員表

区 分 部 門 名	教 授		助 教 授		助 手		技 術 職 員		備 考
	定員	現員	定員	現員	定員	現員	定員	現員	
基礎計則		龍谷光三		古村福次郎		篠原道正 小西正敏		平田勝久 池川和彦	○印は 教務職員
結晶体物性		岩井津一		丸茂文幸		森川日出貴 田中清明		湊 一郎	
無機焼成材料		浜野健也		木村脩七		安田榮一 中川善兵衛		長谷川美憲	
無機熔融材料		佐多敏之		中村哲朗		吉村昌弘 鎌田喜一郎		○原 宏	
高純度材料				星野芳夫		宇都宮泰造 平野真一		吉永善子	
超高温材料 合成無機材料		斎藤進六		沢岡 昭		鈴木健之 三浦 弘		石坂政俊	
複合材料		宗宮重行		今井久雄		伊藤義孝 田中享二			
工 場				小池迪夫		小磯晴通		唯野正三 石井 元	
共 通						多田彦二		鈴木美代子	
所 長 室									
計	8	6	8	8	17	17	12	10	定員 45 現員 41

工業材料研究所将来部門長期計画

系列名	材料基礎	プロセス	機能材料	応用材料工学	研究施設場	
既設部門名	結晶体物性	無機焼成材料		基礎計測		
		無機熔融材料		複合材料		
		高純度材料				
		超高温材料				
		合成無機材料				
第1次計画	材料構造解析	超高压合成材料	エネルギー変換材料	無機基複合材料	水熱合成材料研究ステーション	大型実験場
					材料特殊加工施設	
第2次計画	材料表面物性	超高温真空材料	電子機能材料	材料耐久物性		
	非晶体物理		光材料			
現状	1	5		2		
新設	第1次	1	1	1		
	第2次	2	1	2	1	
計 18	4	7	3	4		
第3次計画			有機電子材料	特殊金属材料		
			複合機能材料	有機基複合材料		

工材研の長津田地区への移転計画は当初の予定より遅れ、今年度の後半から建物の実施設計に入ります。或る程度まで研究所側の要望が織りこまれると聞いています。実際の移転は53年の予定です。

長津田地区に設置される大学院は物理情報工学、電子化学、社会開発工学、精密機械システム、材料科学、電子システム、化学環境工学、生命化学、エネルギー科学、システム科学の10専攻より成る総合理工学研究科としてこの4月発足致しま

した。このうち物理情報工学、精密機械システム、電子システムの3専攻はこの9月に大岡山地区から長津田地区へ移転し、まもなく授業も当地区で再開されます。材料科学専攻には工材研のほとんどの先生が協力して参加していますが、この専攻を修了する第1回の修士課程の学生は明年3月、博士課程あるいは社会へと巣立ってゆきます。物理、金属、無機という材料の基礎を深く身につけた学生諸氏の今後の活躍を期待したいものです。

あとがき

本年度から新しく論文博士会員をお迎えし、東京工業大学窯業同窓会がより充実したことを嬉しく思います。

会員名簿の発行は2年間隔でありますためか、半数以上の方の訂正があり、同窓の皆様方の異動の多いのに驚いております。そのため不備な点のあることのご容赦をお願いします。今回の名簿作成では、同窓生で現東京工業大学職員および元職員の方ならびに大学院卒業と重複されている方が多いので、索引にはそれらを併記して住所索引の便宜をはかったつもりであります。

今回の名簿発行は折悪く物価上昇の激しい時、その上大幅な郵便料金値上げが決まるかどうかという大変なときにぶつかってしまいましたため、止むを得ず予約制をとらせていただきましたが、名簿には母校や卒業生の近況を記録した会誌となっておりますので、同窓生間の最も重要な共通の場として、やはり全員に配布するのが本当だと思います。どうも問題は費用の点ですので、事業資金と名簿代をほとんど唯一の財源といたしております会の状態をご推察下さいまして、今後ともよろしくご協力下さいますようお願い申し上げます。

さらに、今後同窓会名簿・会誌がよくできますように、会員の皆様には宛名変更のつど、お手数でも郵便番号・新住所・電話番号などのご通知をいただくと同時に、クラス会の記事なども積極的にお送り下さいますようお願い致します。

最後に、原稿執筆・編集などにご協力頂いた方々、会員住所変更の通知にご協力下さいましたクラス連絡員の方、学内関係研究室の方々に厚くお礼を申し上げます。

(名簿担当 浜野健也、中川善兵衛)

おねがい

皆様の御援助で会の財政もまずまず黒字をつづけておりますが、印刷費その他、値上がりしておりますので、名簿および会誌の予約金をお送りいただいている方は印刷費実費と送料を合わせ1,000円、そのほか事業資金として1口500円、できれば2口以上をご寄付いただきたく、綴り込みの用紙を利用してご送金のほど、お願い申し上げます。

昭和50年11月20日印刷

昭和50年11月30日発行

編集兼発行人 浜野 建也

印刷所 有限会社極光印刷

印刷者 小柳正敏

発行所東京工業大学窯業同窓会

〒152 東京都目黒区大岡山 2-12-1

東京工業大学 浜野健也 気付

振替口座東京 196855